

# 稲作情報 No.2

発行日：令和8年4月20日  
発行：仙北地域振興局農林部農業振興普及課

～苗半作。小まめな管理で健苗育成に努めましょう～

## 1 気象経過と今後の気象予報

【1か月予報(4/18～5/17)】

4月16日に仙台管区气象台から発表された1か月予報によると、東北地方日本海側の向こう1か月の平均気温は高く、降水量と日照時間はいずれもほぼ平年並の予報です。特に、期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みのため、育苗ハウスの温度管理については十分に注意し、高温障害や病害の発生を防ぎましょう。

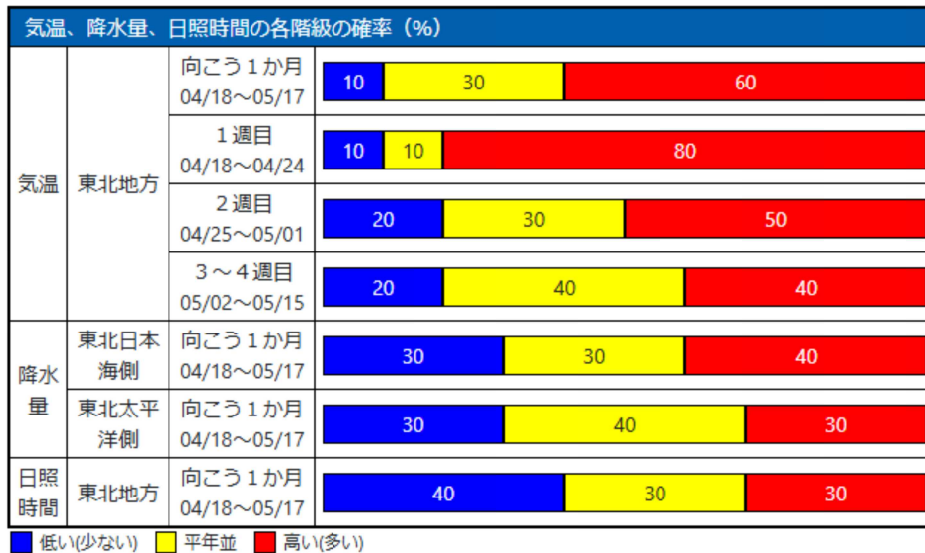


図 東北地方 1か月予報(出典:気象庁HP)

## 2 出芽・育苗期間の管理(中苗)について

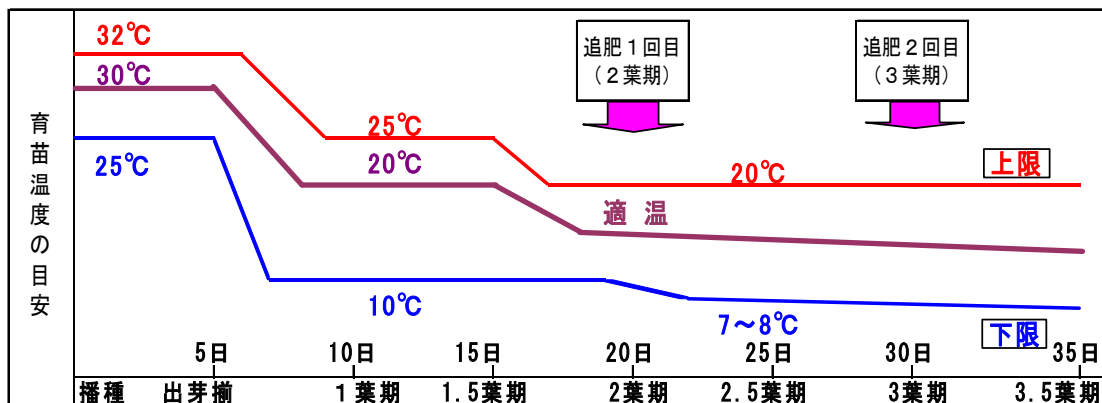


図 育苗温度の目安(中苗)

### ①温度管理について

- 出芽長は0.5cmを目標とします。出芽長を伸ばしすぎると出葉が遅れやすくなるため、注意が必要です。
- 細菌病等の発生の助長を防ぐため、出芽までの温度は32℃を超えないようにします。出芽後の再被覆は行わないでください。
- 通気管理は1葉期頃から実施してください。2葉期頃までは、最高気温25℃以下、最低気温5℃以上を保ちます。2.5葉期を過ぎたら、特に寒い日でない限り夜間もハウスを開放し、移植へ向けて徐々に外気温に慣らしてください。

### ②水の管理

- 出芽完了後のかん水は覆土の持ち上がりを落とす程度とし、靱が露出したものは靱が見えなくなる程度に覆土します。
- かん水は朝または午前中に十分行い、かん水回数を出来るだけ少なくしてください。

### ③育苗期の追肥

- 2葉期と3葉期頃に、それぞれ箱当たり窒素成分で1gを施用します。
- 追肥後は散水して葉身に付着した肥料を洗い流し、肥料焼けを防ぎます。

表 育苗期追肥の目安

		1箱当たり	100箱当たり
かん水量		500cc	50リットル
肥料	硫安	5g	500g
	液肥2号	10cc	1リットル

※育苗ロング肥料を使用している場合は、追肥は不要です。

## 3 苗立枯病の防除対策

### ①耕種的防除法

- 清潔な資材を使用するなど、育苗施設の衛生を保ちます。
- 極端な高温や低温は病害の発生を助長するため、温度管理は十分に注意してください。
- 土壌の過度の乾湿により発生する種類の菌があります。前項を参考に適切な水管理を行ってください。

### ②薬剤による防除法

- 床土混和や播種時に防除薬剤を使用しなかった場合は、出芽後、発病前にタチガレエースM液剤、または出芽後～緑化始期にランマンフロアブルをかん注します。
- 苗立枯病の種類によって防除薬剤が異なるため、薬剤の選定に注意してください。

## 4 もみ枯細菌病の防除対策

近年はもみ枯細菌病の発生が多く確認されています。向こう1か月の平均気温が高くなる予報であることからもみ枯細菌病の発生が懸念されるため、温度管理に注意してください。

### 【病害の特徴】

育苗箱の一部に凹部分が見られることで気がつくことが多い病害です。新葉基部と葉鞘部が白色～淡黄色に退色したり、新葉を引き抜くと簡単に抜ける等の症状が特徴です。



写真 もみ枯細菌病の発病

### 【防除対策】

- (1) 種子消毒剤の効果を十分に発揮させるため、種子予措を適切に行いましょう。また、浸種時の低温等により出芽ムラが生じた場合には先に出芽した籾は過剰な被覆期間となり、細菌病の発病が助長されるため、注意が必要です。
- (2) もみ枯細菌病は高温性の病害で、育苗初期の温度管理が重要です。出芽温度は32℃を超えないようにし、被覆期間を必要以上に長くしないように注意します。出芽後の再被覆は発病を助長するため行わないようにします。
- (3) 緑化期以降は25℃以上にせず、過剰かん水に注意します。
- (4) 前年に発病した場合は、資材消毒剤のケミクロンG等で育苗箱の消毒を実施します。

## 5 育苗期いもち病の防除対策

- 本田のいもち病発病の主な原因は育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。
- 育苗施設内の稲わら・籾殻(伝染源)を撤去し、適正な育苗期防除と葉いもち防除を行うことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。
  - 本田の葉いもちを対象にした箱施用剤は、苗の葉いもちを防ぐことはできないため、育苗期いもち防除は必ず実施しましょう。

表 育苗期のいもち病防除剤 ※次のいずれかで防除を行う

農薬名	使用時期	箱当たり散布量	備考
ベンレート水和剤	播種時～播種14日後まで	500倍液 500mL	かん注
	播種時～播種7日後頃	1,000倍液 1,000mL	
ビームゾル	緑化始期	500倍液 500mL	かん注

※ベンレート水和剤(苗いもち、苗立枯病防除)の播種時処理は、タフブロック又はエコホープDJの防除効果を低下させるため体系処理は行わない。

## 6 育苗期間中の高温障害に注意

今後は気温が高く経過する予報であることから、播種後のハウス内の温度上昇に注意が必要です。

また、曇りであっても地温が急激に上昇する場合がありますため、細菌病や高温障害によるヤケ苗(出芽不良や枯死)が発生する危険があります。高温障害による発芽不良等の被害が大きくなることで、苗の不足や経費のかかり増しに繋がってしまいます。

天気予報を小まめに確認するほか、育苗箱付近への温度計を設置する等によってハウス内の温度管理には細心の注意を払いましょう。

### ～水稻育苗施設内での注意事項～

○水稻育苗終了後のハウスに作付けされた野菜類・花き類において、残留農薬基準値を超過する、あるいは生育障害が起こるなどの事例が発生しています。水稻育苗後に野菜類・花き類を作付けする場合は、以下の対策を必ず実施してください。

- ①水稻育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷き、育苗期に使用した農薬が土壌に接触・浸透しないようにしてください。
- ②箱施用剤を移植前～当日に使用する場合は、育苗施設の外で使用します。
- ③育苗終了後の無孔シート撤去時は、無孔シート上の水や土壌などを育苗ハウス内にこぼさないように作業してください。

**「春の農作業安全運動」実施中!**

令和8年4月20日～5月31日